

「気になる子ども」を対象とした保育実践に関する一考察

— 幼児用社会的スキル尺度・保育者評定版の結果を参照しながら —

野中陽一郎 (高知大学教育学部)
谷脇のぞみ・矢田 崇洋・岡谷 里香・都築 郁子・森下 英恵・
大西 美玲・峯 智子 (高知大学教育学部附属幼稚園)
土井原崇浩・野角 孝一・玉瀬 友美 (高知大学教育学部)
吉岡 一洋 (高知大学地域協働学部)

A Study of Early Childhood Care and Education for the “Concern” Children: Referring to Results of a Teacher-rated Social Skills Scale for Preschool Children

Yoichiro Nonaka (Faculty of Education, Kochi University)

Nozomi Taniwaki, Takahiro Yada, Rika Okatani, Ikuko Tsuzuki, Hanae Morishita,
Mirei Onishi, Tomoko Mine (Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University)

Takahiro Doihara, Koichi Nozumi, Yumi Tamase (Faculty of Education, Kochi University)

Kazuhiro Yoshioka (Graduate School of Integrated Arts and Science, Kochi University)

要 約

本研究は、附属幼稚園における保育実践者と研究者との連携による「気になる子ども」に対する具体的な支援方法の事例研究を積み重ねていく端緒として、関係論の立場に立脚した「気になる子ども」を幼児の社会的スキルの枠組みから捉える探索的な検討を行った。その結果、幼児の社会的スキルを構成する3因子ごとの保育者評定による年齢差及び性差を明らかにした。また、社会的スキル特性に基づくクラスター分析の結果に基づき、各クラスターに所属する幼児の特徴を示した。幼児の社会的スキル特性により捉えた特徴の活用方法を検討し、研究者が介入する保育実践の新たな可能性を明らかにした。以上の結果を踏まえ、今後の附属幼稚園における「気になる子ども」に対する保育実践者と研究者との連携に基づく保育実践研究の方向性に関する考察を行った。

キーワード：気になる子、幼児、保育者評定、社会的スキル尺度、保育実践者と研究者との連携

I 問題と目的

幼児期における教育の重要性は、古くから指摘され、近年においては、保育の質のあり方に注目が集まっている。鈴木(2014)は、国際的動向を鑑み、保育の質を高めるためには、幼児教育・保育の価値を社会全体が認識すること、質を改善するためのシステム構築、保育学・教育学の協働による長期縦断研究が必要であることを指摘している。保育の質の捉え方は、社会文化的かつ時代背景的な価値判断や研究者の焦点の置き方により多様性がみられる。しかし、国内外における保育の質の捉え方、保育の質を評価する手法や子どもに及ぼす影響等、歴史的経緯を踏まえた研究知見について詳細な整理もなされてきた(e.g. 秋田・箕輪・高櫻, 2007; 秋田・佐川, 2011)。こうした中、保育の質を高める重要な要素として、保育者の力量や専門性が指摘されている(e.g. 鍛冶・中島, 2009; 鈴木, 2009)。保育者の力量や専門性を高めるには、どういった視点が求められているのだろうか。

本間(2012)は、保育経験10年以上の保育者対象の調査を実施し、10年前と比較して保育の質が悪くなった要因、現在の保育の質について不安に思う要因の双方において、「気になる子」の増加が自

由記述により第1の要因として挙げられていたことを明らかにしている。この結果は、実際の保育者が「気になる子ども」の増加を保育の質に影響を及ぼす第1の要因として考えていることを如実に表すものであろう。こうした「気になる子ども」の捉え方は多岐にわたるが、例えば、本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島(2003)によれば、「気になる子ども」とは、知的には顕著な遅れがないにもかかわらず、「感情のコントロールがうまくできない」、「対人的トラブルが多い」といった行動上の問題を抱えている子どもであるとされている。一方、本荘(2012)は、「気になる子ども」に関する先行研究を概観し、研究の焦点は多様であるが、様々な行動特徴に対して具体的な支援方法の事例研究を重ねていくことの重要性を指摘している。若山(2017)は、日本における「気になる子ども」に関する研究動向を3つの時代区分に整理するとともに、2013年以降の3つ目の時代において障害という要因にのみ還元するのではなく、子どもと保育者を取り巻く全体から子どもを捉える関係論の立場の重要性が改めて認識されてきたことを指摘している。つまり、本荘(2012)や若山(2017)に基づけば、当該児と保育者を取り巻く関係論の立場から「気になる子ども」に着目し、具体的な支援方法の事例研究を重ねることが、保育者の力量や専門性を高める上で有用な取り組みになると考えられる。

関係論の立場に立脚し、「気になる子ども」に焦点を置いた研究例として、飯島(2009)を取り上げることが出来る。飯島(2009)は、保育者から「気になる子ども」と報告された5歳児10名を対象に集団活動場面の「ルールのある遊び活動場面」と自由遊び場面の「コーナー遊び場面」において協同遊びに参加できているかどうか2時点の観察をするとともに、保育者評定に基づく子どもの行動変容を検討している。その結果、双方の遊び場面において協同遊びへの参加率が時間を経るごとに高まること、順応性の低さやルール違反における保育者の気になるという評定結果が減少することが示されている。加えて、協同遊びの参加率が最も増加した1名の幼児に着目し、遊び場面における幼児の様子や保育者の介入を具体的な事例として報告している。当該知見は、「気になる子ども」の特徴を顕在化させるだけでなく、実際の保育者の介入のあり方を可視化でき、保育実践を省察する際に有用な資料となり得る。江上・佐々木(2009)は、保育士にとって少し気になる行動が目立つとされた数名の幼児の中から幼児教育課程の学生が観察を通して選定した「気になる」印象を持った1名の幼児に対して3回の非参与観察と3回の参与観察を通じた総計6回にわたる観察を実施し、気になる行動の特徴や保育士のかかわりを示すとともに、当該結果を保育士と共有することは第三者による保育のサポートとして意義があったことを指摘している。浜谷(2013)は、巡回相談に基づく保育実践により紡ぎ出される特徴を2つの軸から構成される4領域があることを示し、関係性と意味レベルを志向する領域において支援する必要性が高い事例が近年多くなっていることを指摘している。江上・佐々木(2009)や浜谷(2013)の知見を鑑みれば、関係論の立場から「気になる子ども」と同定された幼児と保育者との保育実践に対して、介入手法は様々であるものの第三者による介入を行い、当該児を支援する具体的な支援方法に関する基礎的知見を積み上げることは、保育のサポートだけでなく、保育者の力量や専門性の向上に寄与する新たな取り組みになると考えられる。

「気になる子ども」と同定された幼児と保育者との保育実践に携わる第三者の存在を考える際には、保育実践者と連携をとり、保育現場に介入することの出来る研究者に注目することが出来る。無藤他(2004)は、国立大学附属幼稚園の役割として、大学教育への一層の貢献、大学との連携による研究、実践的資料の作成と提供、外部への研修機会の提供、人材の育成といった5つを指摘している。加えて、文部科学省(2017)は、国立大学附属学校の在り方として、公私立学校とは異なる国立大学の附属学校としての役割を踏まえた機能強化を図り、教員研修にも貢献する学校としての役割があることを指摘している。こうした指摘を鑑みれば、国立大学附属幼稚園と連携可能な研究者には、保育実践に携わる第三者の存在として継続かつ連携した研究を積み重ね、今後の保育者の力量や専門性を高める研修としての基礎的資料を提案していくことが求められるだろう。

こうした中、A大学¹⁾教育学部とA大学教育学部附属幼稚園とが協同した実践研究が、近年活発

に報告されている。例えば、吉岡・阿部・野角・山中・松島(2014)は、A大学に所属する大学教員や美術を専攻とする学生とA大学教育学部附属幼稚園との連携による老朽化した附属幼稚園の門扉・門柱のリノベーションに関する実践を行っている。実践においては、幼児を対象とした門柱に飾るタイルづくりを行うワークショップを開催し、幼児自身に環境構成を意識させ、自身の作品を園に残すという参加型の活動を土台とした幼児期の新しい造形教育を提案するとともに、実際の門扉を制作していくプロセスを明瞭に報告し、附属幼稚園でのリノベーション活動の意義や課題を示している。また、野角他(2017)²⁾は、教育学部附属幼稚園教諭と絵画を専門とする大学教員との連携を試みる中、附属幼稚園の幼児を対象とした巨大な支持体と大量の絵具を使用する3種類の絵具遊び活動の実践を行っている。その結果、絵具を塗る支持体の工夫や課題、幼児の絵具を塗る行為から身体全体を使った表現や見立て遊びへの変容、描いたものを塗りつぶされたくない幼児の絵具遊び活動を行う場所の特徴を絵画の専門家の視点より明らかにしている。こうした取り組みは、幼児期における造形活動を実践する上で美術の専門家の視点から重要な知見を及ぼすものである。

一方、土井原他(2017)は、A大学教育学部と教育学部附属幼稚園が連携して取り組んだ3歳年少児を対象とした絵具遊び活動に着目し、設定された3つの場における観察を行っている。その結果、教員が連続筆で虹の配色で描くことや着衣に絵具を塗った後に生起する幼児の模倣過程、3つの場における年少児の行動特徴や絵具遊びを通じたままごと遊びへの発展を示すことにより、当該絵具遊び活動が国立大学の附属学校としての特性を活かし、地域の幼児教育におけるモデル校としての役割を果たすことを指摘している。野中他(2017)³⁾は、教育学部附属幼稚園に所属する4歳年中児と3歳年少時のそれぞれの集団保育の中で教育学部の教員が協同して実施した描画活動を対象に実践概要や定点観測の報告をしている。その結果、描画活動時における幼児の空間利用状況、各エリアにおける幼児の行動特性を顕在化し、今後の保育実践者と研究者との連携による実践研究を積み重ねていく方策を提案している。土井原他(2017)や野中他(2017)の研究は、各空間エリアで生起する幼児の行動特徴を顕在化させるだけでなく、附属学校にかかわる保育実践者と研究者が連携しそれぞれの専門性を活かした新しい実践を試行していると考えられる。なお、A大学教育学部が所在地を置くA市⁴⁾は、保幼小接続において注目が集まっている地域でもある。例えば、一見・堀越(2017)は、幼小接続カリキュラムを市として組織化・具体化し、カリキュラム開発にまで至っている自治体としてA市に着目し訪問調査をしている。その結果、A市全体の「教育振興ビジョン」における学力対策プランに「保幼小連携」を土台部分として位置付け各学校レベルでの具体化につとめているだけでなく、園児と児童双方のメリットを明確にした交流活動、教職員の交流で組織の繋がりを向上させる取り組みがなされていたことを明らかにしている。そこで、「気になる子ども」をクローズアップした研究は、保幼小接続に対して新たな視点を提案でき、保育者の力量や専門性向上だけではなく、保育の質や研修を充実させていく上でも利点があり、国立大学教育学部附属幼稚園だからこそ着手できる保育実践者と研究者の協同研究の枠組みであると考えられる。それでは、関係論の立場から「気になる子ども」と同定された幼児と保育者との保育実践に対して、第三者の存在として研究者には、どのような介入や取り組みを進めていくことができるだろうか。

飯島(2009)や江上・佐々木(2009)の観察や保育者評定の対象とされた「気になる子ども」は、関係論の立場に立脚し、保育者により選定された幼児である。そこで、関係論の立場に立脚し、「気になる子ども」を選定する際、研究者の第三者的な介入に基づきある特定の科学的な枠組みから「気になる子ども」を捉え、その後の保育実践に携わることは有効な取り組みになると考えられる。淡野(2009)は、保育者用遊び評定リストを担任の保育者により回答を求め、静的遊び得点が高い幼児を捉えるとともに、自由遊び時間の静的遊び得点の高い幼児の社会的行動特徴記録を報告している。当該研究は、特定の科学的な知見から関係論の立場を捉えつつ、保育実践における具体的な支援方法を検討出来る視点を提供したものと考えられるだろう。

それでは、保育実践を念頭に置き、「気になる子ども」を関係論の立場から科学的に捉える際、どのような視点に着目するかが重要となる。佐藤(2000)は、近年の子どもの社会的スキルの低下を指摘し、「引っ込み思案の強い子」や「攻撃性の高い子」等の幼児に焦点を置き、予防的な視点から幼児の社会的スキル訓練の必要性、作成した指導マニュアルに基づく研修及び保育者が実践できるような取り組みを報告している。社会的スキルは、適応を規定する重要な要因として扱われており、幼児教育システムが日本と異なるため留意する必要があるが、Ladd, Birch, & Buhs(1999)によれば、幼稚園入園後1～10週目に測定した幼児の向社会的スキルは同学年の幼児や保育者との関係を築くことに影響を及ぼすこと、幼児が様々な活動に参加することを育むことが幼稚園段階で達成すべき重要な前提条件であることが指摘されている。また、Robinson & Diamond(2014)は、幼児の対人スキルが幼稚園への移行段階における適応と関連することを明らかにしている。こうしたことを鑑みれば、「気になる子ども」を関係論の立場から捉える際、幼児の社会的スキルに着目し、当該幼児の特徴を捉えた上で保育実践に携わることは意義があるものと考えられる。幼児の社会的スキルを測定する保育者評定は、海外だけでなく、日本でも開発されている。その中で、金山他(2011)は、従来開発された尺度の内容的妥当性や構成概念妥当性の問題を指摘し、主張スキル、協調スキル、自己統制スキルの3因子16項目からなる保育者評定に基づき幼児の社会的スキルを測定可能な信頼性と妥当性の高い尺度を開発している。その後、金山他(2014)は、保育者の負担や実用性を鑑み、金山他(2011)の尺度項目から精選及び改訂し、主張スキル4項目、協調スキル4項目、自己統制スキル4項目の3因子12項目からなる幼児用社会的スキル尺度・改訂版を開発している。

そこで、本研究では、附属幼稚園における保育実践者と研究者との連携による「気になる子ども」に対する具体的な支援方法の事例研究を積み重ねていく端緒として、関係論の立場に立脚した「気になる子ども」を幼児の社会的スキルの枠組みから捉えることを目指す。また、社会的スキルによる幼児の特徴を検討し、研究者が介入する保育支援の新たな可能性についても考察を行う。

II 方法

1. 尺度構成

金山他(2014)の開発した保育者評定に基づく主張スキル4項目、協調スキル4項目、自己統制スキル4項目の3因子12項目からなる幼児用社会的スキル尺度・改訂版を使用した。

2. 対象児と調査協力者および調査時期⁵⁾

A大学教育学部附属幼稚園の担任保育者に対して、担当クラス所属の各幼児の普段の様子をもとに、各幼児に対して12項目がそれぞれどの程度あてはまるかを「まったくみられない=1」から「非常によくみられる=5」の5段階評定で回答を求めた。調査時期は、関係論の立場に立脚し、幼児を評定することを求めるため、ある程度の関係性が構築されたと予測される6月に実施した⁶⁾。

III 結果と考察

1. 尺度の検討

先行研究の結果⁷⁾に基づき、各尺度を構成する各因子に対して、信頼性を検討するために α 係数および ω 係数を算出した。その結果、主張スキル($\alpha = .88$, $\omega = .89$)、協調スキル($\alpha = .87$, $\omega = .88$)、自己統制スキル($\alpha = .91$, $\omega = .92$)となり、一定の内定一貫性が確認された。そこで、以降の分析では、金山他(2014)と同様に、項目得点を加算した各因子の得点を用いた。

2. 年齢別及び性別による差違

各因子を構成する項目得点を加算した評定得点に対して、年齢別及び性別に基づき結果を整理した(Table 1)。

Table 1 年齢別及び性別による各社会的スキル評定得点

性別	男 児			女 児		
年 齢	3歳児年少	4歳児年中	5歳児年長	3歳児年少	4歳児年中	5歳児年長
N	8	19	27	14	28	11
主 張	8.38 (3.46)	11.63 (4.31)	12.11 (2.44)	8.21 (2.68)	11.89 (2.50)	13.64 (2.50)
協 調	7.50 (3.16)	10.63 (2.32)	13.07 (2.73)	8.29 (2.71)	13.11 (2.27)	14.27 (2.09)
自己統制	5.75 (2.22)	8.68 (2.05)	10.89 (2.42)	6.57 (2.38)	10.93 (2.94)	11.64 (1.72)

() 内は標準偏差を示す

続いて、年齢差と性差を統計的に分析するため、各因子の評定得点を従属変数とした3(3歳児年少、4歳児年中、5歳児年長⁸⁾)×2(男児、女児)の分散分析を行った。その結果、主張スキルに対しては、年齢の主効果($F(2,101)=17.59, p<.001(\eta^2=.255)$)がみられ、多重比較(Ryan法、 $p<.05$)の結果、4歳児と5歳児の得点が3歳児よりも高かった。なお、性の主効果($F(1,101)=0.68, p=.412(\eta^2=.005)$)及び交互作用($F(2,101)=0.59, p=.554(\eta^2=.009)$)はみられなかった。協調スキルに対しては、年齢の主効果($F(2,101)=37.77, p<.001(\eta^2=.408)$)がみられ、多重比較(Ryan法、 $p<.05$)の結果、5歳児、4歳児、3歳児の順に得点が高かった。また、性の主効果($F(1,101)=7.16, p=.009(\eta^2=.039)$)がみられ、女児の得点が男児よりも高かった。なお、交互作用($F(2,101)=0.84, p=.436(\eta^2=.009)$)はみられなかった。そして、自己統制スキルに対しては、年齢の主効果($F(2,101)=32.09, p<.001(\eta^2=.372)$)がみられ、多重比較(Ryan法、 $p<.05$)の結果、5歳児、4歳児、3歳児の順に得点が高かった。また、性の主効果($F(1,101)=5.63, p=.020(\eta^2=.033)$)がみられ、女児の得点が男児よりも高かった。なお、交互作用($F(2,101)=0.83, p=.440(\eta^2=.010)$)はみられなかった。本研究の結果を金山他(2014)と比較⁹⁾するならば、主張スキルにおいて性差が認められなかった点や4歳児と5歳児の差がみられなかった点、協調スキルにおいて交互作用がみられなかった点が相違点として挙げられる。むろん、金山他(2014)と研究目的が異なるため、この相違を重視するより、対象幼児の協調スキルや自己統制スキルにおいて男児よりも女児が高く、全体的特徴としては概ね年齢段階に応じて上昇していることが示されたこと、各幼児の評定得点に基づき今後の保育支援のあり方に注目する必要があると考えられる。

3. 社会的スキル特性に基づく対象幼児の分類

関係論の立場に立脚した幼児の3つの社会的スキル評定得点を各幼児の社会的スキル特性とした。当該幼稚園に所属する幼児の得点傾向や区分を見出すため、各幼児の社会的スキル特性を基にユークリッド距離の平方を求めクラスター分析(Ward法)によって対象幼児の分類を行った。その結果、解釈可能性から3クラスター解を採用した。クラスターごとの幼児の各社会的スキル特性の平均値及び分類された各クラスターに所属する幼児の年齢区分による人数をTable 2に整理した。

Table 2の結果から、第1クラスターは、3つの社会的スキル特性全てが最も高いグループであり、年齢区分からは5歳児、4歳児、3歳児の順に人数が変動し、3歳児は1名のみが所属していた。

Table 2 各クラスターにおける幼児の社会的スキル特性と年齢区分の人数

クラスター	N	年 齢 区 分	主 張	協 調	自己統制
第1	30	3歳児1名、4歳児12名、5歳児17名	12.97(2.81)	15.60(1.31)	12.97(1.99)
第2	54	3歳児5名、4歳児30名、5歳児19名	11.91(2.80)	11.41(1.60)	9.65(1.40)
第3	23	3歳児16名、4歳児5名、5歳児2名	7.87(3.03)	7.43(2.24)	5.26(1.26)

() 内は標準偏差を示す

第2クラスターは、全体の人数比も最も高く、3つの社会的スキル特性全てが真ん中に位置するグループであり、年齢区分からは4歳児、5歳児、3歳児の順に人数が変動し、3歳児は5名所属していた。第3クラスターは、3つの社会的スキル特性全てが最も低いグループであり、年齢区分からは3歳児、4歳児、5歳児の順に人数が変動し、5歳児は2名が所属していた。そのため、対象幼児を幼稚園という集合体の位置づけから捉えた際、第1グループに所属した3歳児1名や第3グループに所属した5歳児2名に焦点を置き、集団活動場面における行動特徴、他の幼児や保育者との関わりについて検討することは研究者の介入した新たな実践研究と位置づけられよう。一方、本研究は、飯島(2009)や江上・佐々木(2009)のような関係論の立場に立脚し、保育者の捉えた幼児の特性を社会的スキルという点から可視化することが出来た。そのため、関係論の立場をより重視するならば、各担任保育者のクラスの中での幼児の位置づけから介入する幼児を決定することもできる。また、当該結果を活用することは、保育者に新たな省察の契機や保育サポートをもたらすと考えられる。今後は、当該結果を活用した保育カンファレンスの実施、各幼児の社会的スキル特性に基づき取り組むべき保育支援の視点を提供していくことも求められるかもしれない。

IV 総合的考察

本研究は、飯島(2009)や江上・佐々木(2009)と異なり、「気になる子ども」を関係論の立場に基づき、幼児の社会的スキルという特定の科学的視点から捉えることができた。また、社会的スキル特性から、幼稚園という集合体に所属する対象幼児の3つのグループの特徴を捉え、幼児の年齢段階を加味した研究者の介入する保育実践の新たな可能性を示すことが出来た。しかし、飯島(2009)や淡野(2009)を鑑みれば、今後は、本研究の結果に基づき特定の幼児や幼児の集団に焦点を置き、行動特徴を観察することも求められるだろう。また、鈴木(2014)の指摘する保育の質を鑑み、長期縦断的な視点で本研究の結果を土台とした実践研究を展開することも有用だと考えられる。なお、当該幼稚園では、保育実践者と研究者が連携した集団保育場面における絵具遊び活動¹⁰⁾が活発である(土井原他、2017；野中他、2017；野角他、2017)。そのため、本研究の結果に基づき、保育実践者と研究者が連携した集団保育場面での活動の際、参与観察に基づき幼児の行動特徴を丹念に見取ることも重要と考えられる。また、各研究者の専門性を鑑み、様々な活動時の幼児に対する支援方法を考案し、保育実践者の保育サポートや研修の一翼を担える体制を検討していくことも求められるだろう。

本研究は、附属幼稚園における保育実践者と研究者との連携による「気になる子ども」に対する具体的な支援方法の事例研究を積み重ねていく端緒として、関係論の立場に立脚した「気になる子ども」の実態を幼児の社会的スキルの枠組みから捉えたにすぎない。今後は、幼児の社会的スキル特性を踏まえ、様々な集団活動場面における各幼児の行動特徴を記述した検討も必要になるだろう。そして、当該幼児に対する保育者のかかわりはどのようになされているのか、どのような保育支援が必要になるかも併せて検討していくことが求められる。附属学校園に携わる研究者は、自身の専門性に基づきながら、保育実践者と連携した知見を汲み上げ、保育の質に寄与するエビデンスや保育のあり方を構築していく必要もあるだろう。このような考察が、保育の質及び保育者の専門性や力量向上に注目が集まっている時期に行われたことにより、幼児教育を担う人材育成に必要な研修プログラムの改善に関する議論を次なるステージに進める一助になったと考えられる。

註

- 1) 実際には、正式名称が使用されているが、本稿では匿名性を鑑み、Aという記載を用いている。なお、これ以降のAという記載は、全て同一大学教育学部、教育学部附属幼稚園のことを示している。
- 2) 実際の論文の中では、匿名性を鑑み、K市にある附属幼稚園といった記載を用いている。

- 3) 実際の論文の中では、匿名性を鑑み、四国地方に所在地を置く国立大学法人教育学部附属幼稚園といった記載を用いている。
- 4) 実際の論文では、正式名称の市名が用いられているが、匿名性を鑑みA市という名称で表現を統一する。なお、本稿のAは全て同一のものを表わすものである。
- 5) 対象とした実際の幼児は、5歳児年長2クラス(各クラス18名、総計38名)、4歳児年中2クラス(各クラス23名と24名、総計47名)、3歳児年少1クラス(22名)の総計107名であった。
- 6) 実際には、保育実践者と研究者が連携して取り組んでいる「絵具遊び活動」の打合せが2017年5月30日に行われた。その際、本研究の第1著者より「特定幼児に対する効果的な介入方法」を確立するという目的に基づき、当該尺度に対する評定の意義を踏まえ、評定に関する説明及び依頼を行った。その後、保育実践者の承諾や附属幼稚園の園長の承認を得た上で担任保育者による評定がなされた。
- 7) 本研究は、関係論の立場に立脚し、担任保育者に幼児を評定することを求めたため、担任保育者による幼児1人1人の評定を独立した各幼児の評定得点と捉えている。しかし、保育者による評定差の可能性も考えられる。補足的に2クラスが存在する5歳児年長と4歳児年中の各評定得点に差がみられるか、それぞれ対応のない t 検定により検討を行った。その結果、5歳児年長には3つの評定得点に差がみられなかったものの、4歳児年中には主張スキル($t(36.52)=4.44, p<.001(r=0.59)$)と自己統制($t(37.02)=5.39, p<.001(r=0.66)$)に有意な差がみられた。本研究の全ての結果は、評定対象である幼児の実態を反映したものか、評定者の評定基準の違いであるか不明確な部分もあり、課題が残る。
- 8) これ以降、3歳児年少を3歳児、4歳児年中を4歳児、5歳児年長を5歳児と省略した記載を用いた。
- 9) 金山他(2014)は、金山他(2011)を再分析したものであるが、分析対象とした幼児1493名のデータを3歳児、4歳児、5歳児、6歳児という明確な年齢区分をしている。しかし、本研究の報告では、各クラス所属の幼児として年齢区分を一括して扱っているため、明確な区分において相違が考えられる。
- 10) 絵具遊び活動は、形態や対象者が異なるものの、2015年度より継続している保育実践者と研究者との連携による実践であり、2017年度は対象児の年齢毎に絵具遊び活動が実施されている。

引用文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子(2007). 保育の質研究の展望と課題 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 256-272.
- 秋田喜代美・佐川早季子(2011). 保育の質に関する縦断研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 217-234.
- 土井原崇浩・野角孝一・玉瀬友美・谷脇のぞみ・岡谷里香・森下英恵・都築郁子(2017). 附属幼稚園における絵具遊び活動：幼児の行動等を考察して 高知大学教育実践研究, 31, 17-21.
- 江上園子・佐々木奏恵(2009). 幼児教育課程の学生と保育現場との互恵的な関係を探る－“ちょっと気になる子ども”の観察を通して－ 北海道教育大学紀要(教育科学編), 60, 165-177.
- 浜谷直人(2013). 保育実践と発達支援専門職の関係から発達心理学の研究課題を考える：子どもの生きづらさと育てにくさに焦点を当てて 発達心理学研究, 24, 484-494.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子(2003). 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究, 25, 50-61.
- 本間英治(2012). 保育の質に関する保育士の意識の実態－A市内における保育士へのアンケート調査を通して－ 保育学研究, 50, 192-201.

- 本荘明子(2012). 「気になる」子どもをめぐっての研究動向 愛知教育大学幼児教育研究, 16, 67-75.
- 一見真理子・堀越紀香(2017). 幼小接続期のカリキュラム 高知市における保幼小連携－「人をつなぐ・組織をつなぐ・教育をつなぐ」国立政策研究所(著) 幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉(pp.62-65) Retrieved from https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf (2017年11月1日)
- 飯島典子(2009). 「気になる」子どもの社会的遊びへの参加 発達研究, 23, 1-14.
- 鍛冶礼子・中島千恵子(2009). 保育の質を高めるための指導計画の評価－担任保育者による評価内容の分類－ 幼年教育研究年報, 31, 71-81.
- 金山元春・金山佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子(2011). 幼児用社会的スキル尺度(保育者評定版)の開発 カウンセリング研究, 44, 216-226.
- 金山元春・金山佐喜子・磯部美良・清水寿代・佐藤正二・佐藤容子(2014). 幼児用社会的スキル尺度・保育者評定版の改訂 高知大学教育実践研究, 28, 13-19.
- Ladd, G. W., Birch, S. H., & Buhs, E. S. (1999). Children's social and scholastic lives in kindergarten: Related spheres of influence? *Child Development*, 70, 1373-1400.
- 文部科学省(2017). 教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて－国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書－ 高等教育局大学振興課教員養成企画室 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/1394996.htm(2017年11月1日)
- 無藤 隆・岩立京子・倉持清美・西坂小百合・森下葉子・青木聡子(2004). 保育者研修において附属幼稚園が果たす役割－幼児教育未来研究会を通して－ お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 1, 1-11.
- 野中陽一朗・岡谷里香・森下英恵・都築郁子・谷脇のぞみ・土井原崇浩・野角孝一・吉岡一洋・小松和佳・玉瀬友美(2017). 描画活動時における幼児の空間利用状況に関する探索的検討－定点観測結果を参照しながら－ 高知大学教育学部研究報告, 77, 21-31.
- 野角孝一・土井原崇浩・玉瀬友美・谷脇のぞみ・岡谷里香・都築郁子・森下英恵(2017). 絵具遊び活動の検証－高知大学教育学部附属幼稚園での実践を通して－ 高知大学教育実践研究, 31, 9-16.
- Robinson, C. D., & Diamond, K. E. (2014). A quantitative study of head start children's strengths, families' perspectives, and teachers' ratings in the transition to kindergarten *Early Childhood Education Journal*, 42, 77-84.
- 佐藤正二(2000). 幼児の社会的スキル訓練について 幼年教育研究年報, 22, 3-9.
- 鈴木文代(2009). 保育の質の向上に関わる実証的研究－子どもの気持ちに沿える言葉かけの意識化を図る－ 愛知教育大学幼児教育研究, 14, 35-43.
- 鈴木正敏(2014). 幼児教育・保育をめぐる国際的動向－OECD の視点から見た質の向上と保育政策－ 教育学研究, 81, 78-90.
- 淡野将太(2009). ひとりで遊んでいる子どもの社会的行動特徴 - 静的遊びについて - 発達研究, 23, 107-114.
- 若山飛鳥(2017). 「気になる」子ども研究の展開－1982年から2016年まで－ 武庫川女子大学大学院教育学研究論集, 12, 57-62.
- 吉岡一洋・阿部鉄太郎・野角孝一・山中 文・松島朝秀(2014). 附属幼稚園におけるリノベーション活動を通じた造形教育の研究 高知大学教育実践研究, 28, 119-129.

付記

本研究は、平成29年度高知大学教育学部門研究プロジェクト「絵具遊び活動に関する実践的研究－学部教員と連携した幼児教育プログラムの開発－」の助成を受け行ったものの一部である。